

新・生物多様性国家戦略策定後の生物多様性に関わる動向

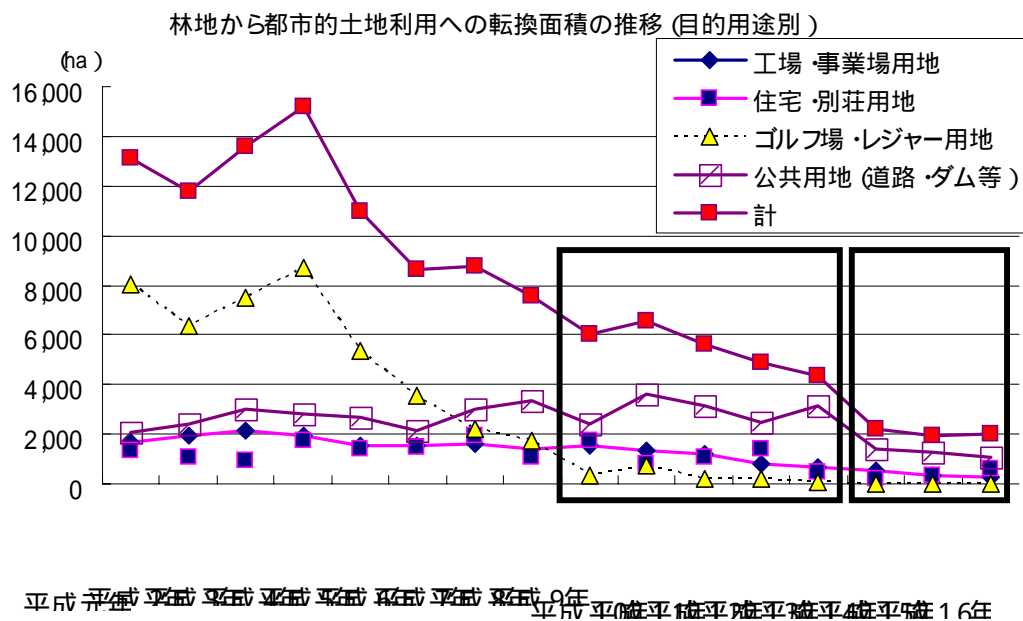
第 1 の危機（人間活動に伴う負の影響）

新・国家戦略策定時の認識

- ・開発や乱獲など人間活動に伴う負のインパクトによる生物や生態系への影響。
- ・生息・生育環境の破壊や悪化、乱獲・盗掘等により、多くの種が絶滅の危機。
- ・湿地生態系の消失が進行。島嶼や山岳部など脆弱な生態系に種々の影響。

新・国家戦略後の状況

- ・「林地から都市的利用への土地利用転換面積」が、平成 13 年までの 5 年間の平均（年 5000 ha 程度）から 2000 ha 程度へ減少したものの、平成 14 年以降は横ばいで推移。



出典：土地白書

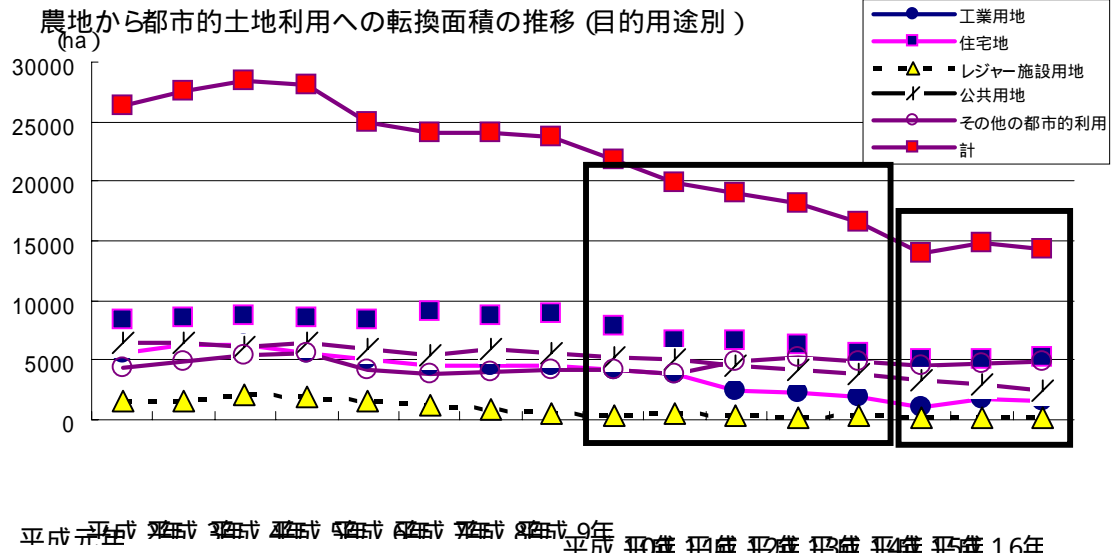
新・戦略策定前 5 年間の（年平均）
対前年増減率 [H9-10] ~ [H13-14]

- 15.9 %

新・戦略策定後の（年平均）
対前年増減率 [H14-15] ~ [H15-16]

- 4.1%

・宅地への転換が多くを占める「農地から都市的利用への土地利用転換面積」も、平成13年までの減少傾向から平成14年以降は横ばいで推移（年間1万5000 ha程度）。

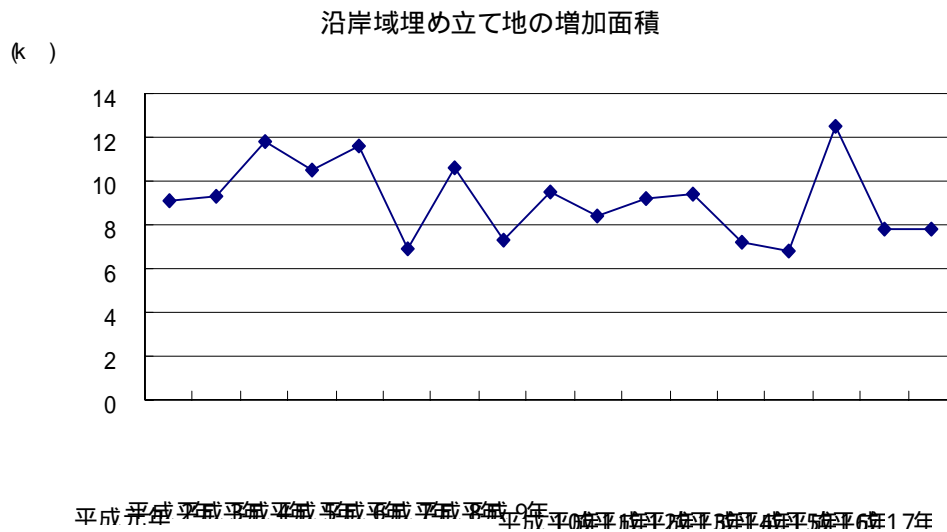


出典：土地白書

新・戦略策定前5年間の(年平均) 対前年増減率 [H9-10] ~ [H13-14]
- 8.4 %

新・戦略策定後の(年平均) 対前年増減率 [H14-15] ~ [H15-16]
1.2%

・沿岸域の埋め立て面積は、近年ほぼ横ばいで推移（年間800 ha程度）。



出典：国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」

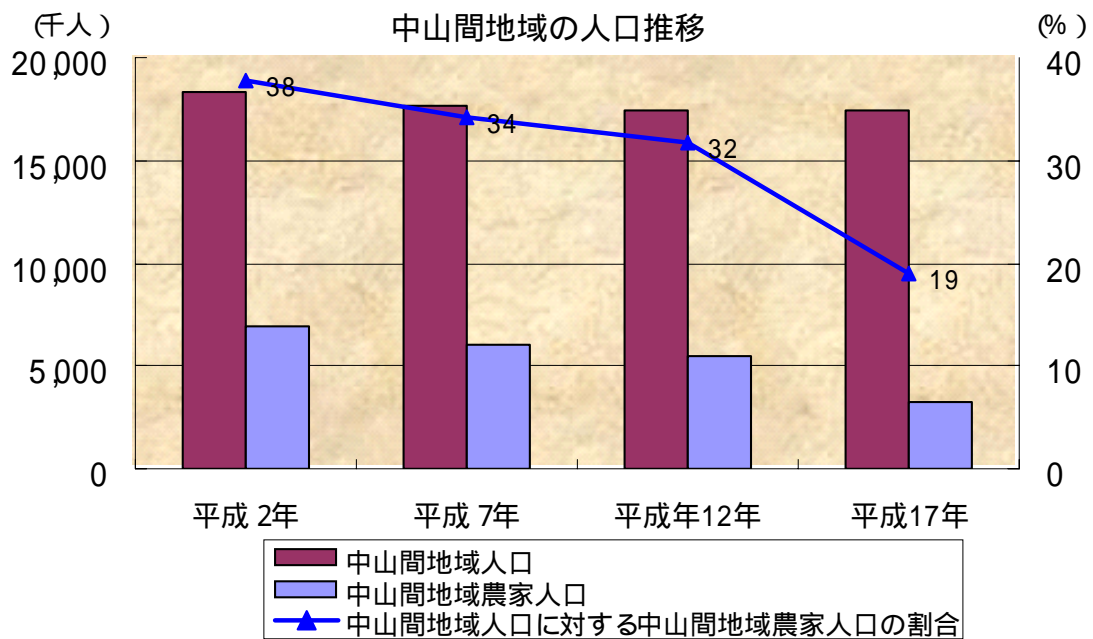
第 2 の危機（人為の働きかけの縮小後退）

新・国家戦略策定時の認識

- ・特に里地里山地域における人間活動の縮小や生活スタイルの変化に伴う影響。
- ・経済的価値減少の結果、二次林や二次草原が放置。耕作放棄地も拡大。
- ・人工的整備の拡大も重なり、人為の働きかけにより維持されてきた里地里山生態系の質の劣化が進行、中大型哺乳類の生息域が拡大、特有の動植物が消失。

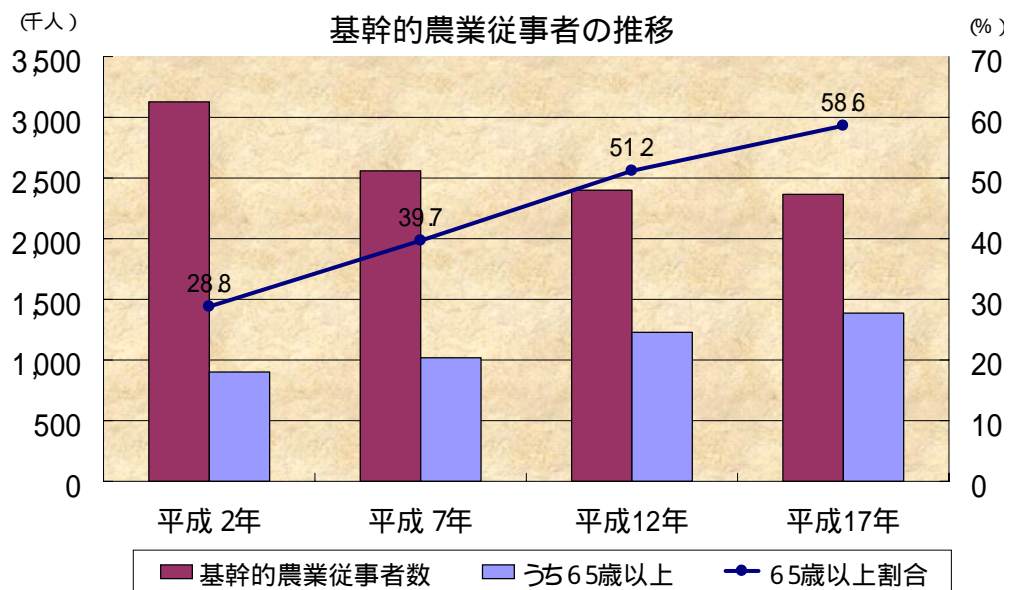
新・国家戦略後の状況

- ・里地里山の維持管理を担う中山間地域については、人口はほぼ横ばいであるが、農家人口は 552 万人(H12)が 329 万人(H17)へと大きく減少。その結果、中山間地域における農家人口の割合は 19%に低下。

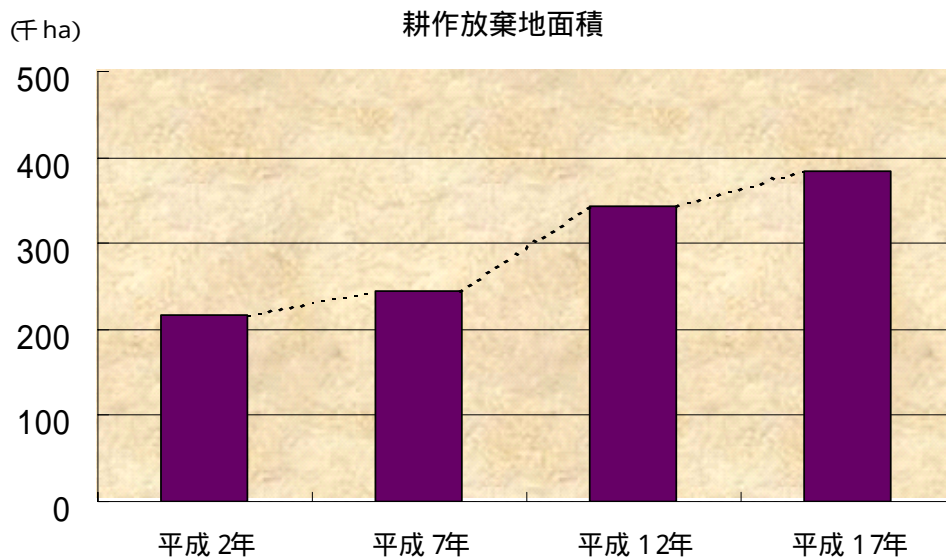


出典：農林水産省「農業センサス」

- ・ 基幹的農業従事者（普段農業に従事している人）は、240万人(H12)から237万人(H17)と微減にとどまっているが、65歳以上の割合が59%となり一層の高齢化が進行。



- ・ 耕作放棄地が増大し、平成17年には39万haとなり、平成12年から4万ha増加。



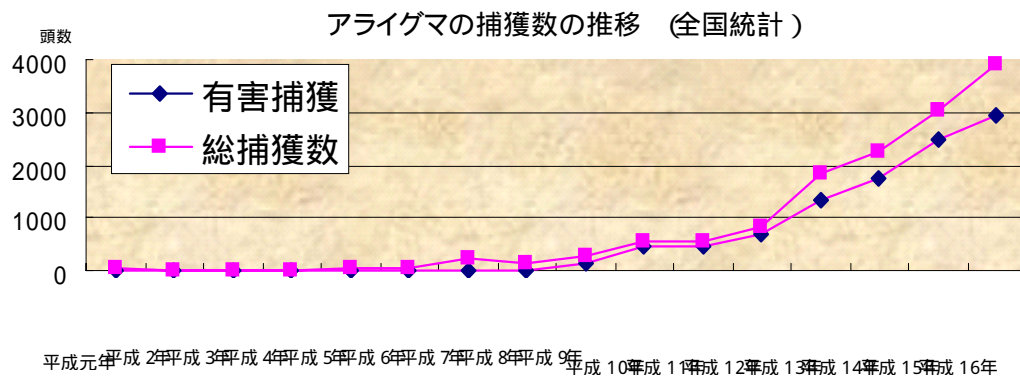
第 3 の危機（外来生物等による生態系の攪乱）

新・国家戦略策定時の認識

- ・ 移入種等人為によって外部から持ち込まれることによる生態系の攪乱。
- ・ 国外又は国内の他地域から様々な生物種が移入。在来種の捕食、交雑、環境攪乱等の影響が発生。
- ・ 化学物質による生態系影響のおそれ。

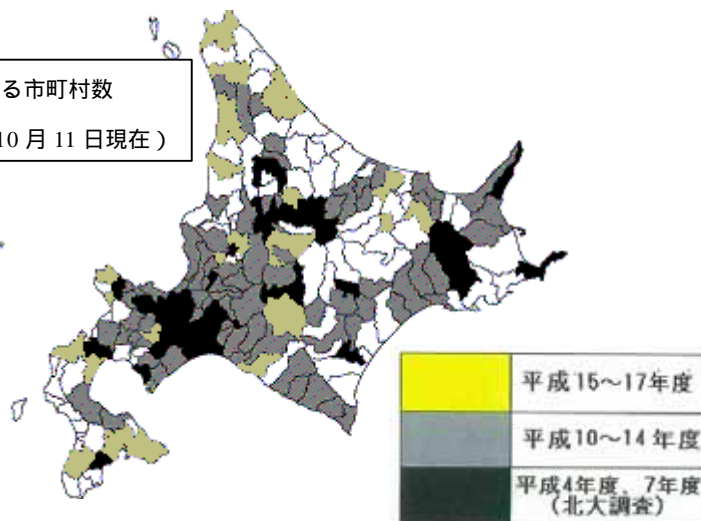
新・国家戦略後の状況

- ・ 有害鳥獣捕獲をはじめとする全国におけるアライグマの捕獲数が、平成 16 年に 4 0 0 0 頭弱まで増加（H14～H16 の 3 ヶ年の対前年増加率は平均 3 1 %）。



出典：環境省「鳥獣統計」

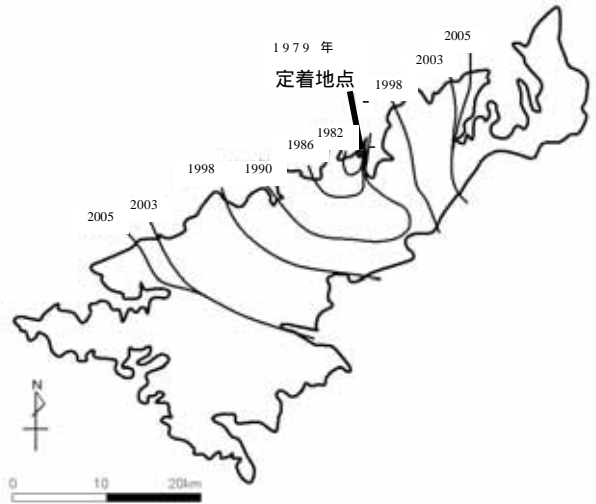
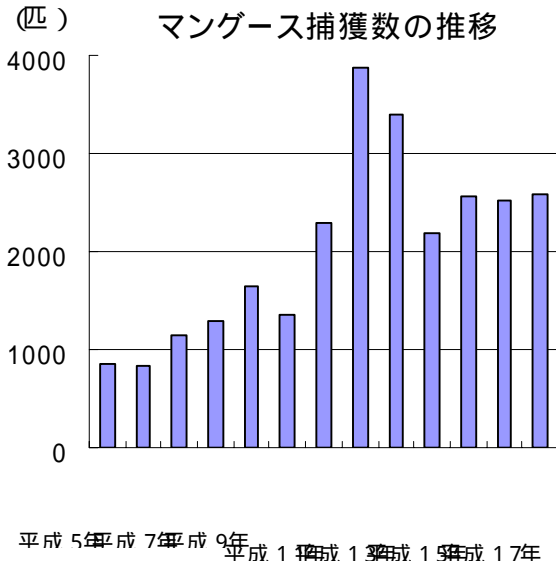
生息または目撃情報のある市町村数
119 市町村（平成 17 年 10 月 11 日現在）



図：北海道におけるアライグマの分布拡大の例

出典：北海道庁作成資料

- ・ 奄美大島においては、平成 14 年以降も年 2 5 0 0 頭程度のジャワマンゲースの駆除を行っているが、その生息域は拡大する傾向にあり、アマミノクロウサギなど在来生物の生息への脅威が拡大。



図：奄美大島におけるジャワマンゲースの分布拡大（定着 1979～2005 年度末）

出典：環境省業務資料